

## オーストリア「皇太子」の日本訪問(5)

フランツ・フェルディナントの訪日日記  
《1893(明治26)年8月2日～25日》(その5)

渡辺 肇

倉敷芸術科学大学大学院人間文化研究科

(2006年10月5日 受理)

### 8月13日京都にて(承前)

そして日本は我々を目で追う事を既に学んだのだ。これらの重要な建造物<sup>180</sup>の意味を誤解したり、それらに相応しい敬意を拒んだりするつもりは全く無いのであるが、今日の時代の凶々しい若造である高くて大きい煙突が何百年も経った故老である寺院の隣にその寺院の景観を覆って小生意気に聳え立っていると、冒瀆に対する異議が起こって来るのであって美しさと気品を楽しむ事が現実によって乱されるべきでないという利己主義が目覚めて来るのを私自身に於いても感じるのである。とにかくかなり多数の日本人が彼らの祖国がかくも短期間に修得した欧州の成果を当然の事として立派に評価するのであろう。しかし昔の宗派の創始者達や寺院の創建者達が墓場から復活して来て日本に起こっている事を見てその見た事を奈良の古き大仏に物語ったとすれば大仏は又もや頭を失ってしまうと頭を振るであろうと私は信ずるのだ。

### 8月14日京都にて

私は非常に称賛されている琵琶湖を訪問する希望を強く持っていたのでそこに向って東海道鉄道で出発した。トンネルを一つ越えて北東に鋭く方向を変え果てしない米作大農園<sup>181</sup>を通して少し走ると我々の前に朝日が注ぐ美しい湖があった。馬場駅<sup>182</sup>で御料列車から馬車に乗換え湖岸に位置する街である大津に向った。そこは滋賀県および既に東山道つまり東の山国の道路に属している近江の国の中心地である。この都市はそれ自身誠に不快な評判を獲得した。1891(明治24)年に我々も通過したある通りでロシア皇太子に対して行われた陰險な暗殺計画<sup>17</sup>によってである。日本では未だに普通より厳しい警察の措置が執られている状況はその所為であると私は言ったのだ<sup>183</sup>。一挙手一投足が警護員に見張られている。

琵琶湖の名前は琵琶と名付けられている楽器の形から来ている。多くの言伝えがこの湖水と結び付いており日本の説話文学の中で大きな役割を演じており富士山と同じく地震によって生成したと言われていた。青く輝く湖面によってこの湖は緑の丘陵<sup>みづうみ</sup>と林で魅力的に囲まれている。小さな幾つもの村落が湖岸を縁取っているのは生きる喜びに満ちた日本人

達が絶景の景色の魅力を正当に評価する事を知っていたからだ。牧歌的な田園情景がここでは我々の前にあり暫らくの間ここに留まって夢想して過したいと言う意欲が観察者を襲う。建物の建築様式の違いを度外視すればシュタルンベルク湖<sup>184</sup>の岸にいと信じられる程である。多くの汽船と帆船が湖岸の色々な地点を結んであちこちに移動している。

我々は小さな蒸気船に乗込んだ。この船は<sup>あな</sup>喘ぎながら<sup>うめ</sup>呻きながら、たぶん今まで経験した事が無い程の快速で青い水面を<sup>か</sup>掻き分けた。しかし残念ながら航海の楽しみは間断なく汽笛が鳴らされたので邪魔されたのだ。その事は、この船の、もっと正確に言えばそうではなくて一般的な汽笛の使用法に従った船長の、非常に悪い習慣と言わねばならないだろう。他船と遭遇、挨拶、合図をする度に耳障りな汽笛が鳴らされた。大津から6キロメートルほど西方<sup>185</sup>の湖岸の唐崎に停泊した。当地で魅力の中心となっているのは有名な松の樹であってキリスト生誕以前には植えられていたらしいが、いずれにしろ古代の遙か昔の時代に起因するのであるから、何千年ではないにしろ何百年もが経過して正当にも聖なるものとなったこの樹は人々の崇拜を満喫してきたのだ。しかし、樹幹の高さはたった27メートルしかない。というのはこの樹が若木の際に日本の造園術が発揮されて犠牲となってしまったからからだろう。これに反して幹の外周は22メートル以上あり、枝の末端が形成する外周は300メートルに達する。枝は扇状に膨らんでいて下方にたれているので、人は場所によっては前屈みの姿勢で枝の下を歩き廻る事が出来るし、蛇の様に曲がりくねって伸びていて、矯正用の添木か石で出来た台で支えられている。畏敬の念を起こさせる様な印象と共に巨大な事の方が印象を<sup>もたら</sup>齎すこの樹は枝の下に神道の神殿を一つ完璧に<sup>おさ</sup>納めている。幹の中で穴が見られる場所は丁寧<sup>ま</sup>に塞がれている。またこの樹は雨が苦手の様で樹冠は小さな屋根で保護されているが、総ての気配りにも拘らず外観から推察すると弱っている様に見える。今年はこの老木の至る所が酷く毛虫に取付かれてしまったのだ。

.....  
 以上が前回ゲラ刷まで完成していたが紙幅制限の為に削除された部分で今回の紙幅制限に収まる部分。以下途中省略して『訪日日記』の最後の部分の訳を掲載する。  
 .....

#### 8月25日、ヴァンクーヴァーに向かう洋上にて

午前中、私に伺候する為に公使館員の首座たるビーゲレーベン男爵、クライター総領事ならびに日本側接伴員諸氏が現れた。私は日本側接伴員諸氏の気転の利く事と倦む事知らぬ熱意に対して全面的な認知を与えるのだ。また我々に差遣された宮廷の官吏達と仕丁達、なかんずく我が友たる主獵局属官<sup>13b</sup>と、我々が死刑執行人と<sup>あだな</sup>綽名した常に抜刀していた男<sup>13a</sup>もやって来た。彼らに与えた勲章に対する謝意を表しに来たのだ。

一緒に航海したことを永く記念するために乗組みの士官たちとの写真を撮らせた。それ

から甲板上で荘重な礼拝を挙行了た。

遂に困難な瞬間がやって来た。その瞬間に我々の素晴らしい乗艦や、全員が真に評価すべきであると理解出来る様になっていた、私の艦上生活を可能な限り快適に過ごさせる様に常に努力を怠らなかつた乗組みの士官達や、そして誠実な下士官兵<sup>401</sup>達に別れを遂げるのだ。》エリーザベト号《は、かくも忠実に我々を遠く離れた洋上にまで齎<sup>もたら</sup>してくれた8ヵ月間に、私の故郷となつてしまつていたのだ。この艦上で私は満足し幸せに感じていたし、陸地に長期間滞在し再び艦上に戻つた際には何時も、旅する者が異国の地から戻つて祖国の大地に足を踏入れる時に感じる様な喜びの気持を感じたのだ。この艦上で我々が海軍将校団に流れている良き軍人精神と卓越した戦友意識を学び知つたのだ。努力にも労苦にも尻込みする事無く、栄誉はあつても困難な任務を適切に果たす為にどんな瞬間も昼夜を問わず自分の職務にあつた、私に対してかくも親しくなつた艦長の細心の注意と世話の御蔭で、我々が副長<sup>402</sup>の優秀なる職務遂行の御蔭で、航海長の才能と几帳面さの御蔭で、更には士官全員の職務精励の御蔭で、一緒に航海した事の総ての目的が総ての点で誇りを持って喜べる程の満足度にまで達したのだ。様々な港に比較的短期にしか滞在しないのに常に蒸気の力で進行する急速な時間の経過は特に機関科諸員に非常に途轍<sup>とてつ</sup>もない要求を求めたが、機関科諸員はあらゆる点でそれらの要求に<sup>こた</sup>へたのだ。

非常なる満足を以つて私は下士官兵達の正しく模範的な態度を思い出してしまうのだ。彼らは高貴なる義務を履行する為に、特に熱帯的な気候<sup>もと</sup>の下で我々が享受した様なその不快さを軽減するような便宜を受ける事も無く、辛抱強く最後まで頑張り抜いたのだ。最後に非常に強調するに値する事情は、我々の下士官兵たちが陸上に於いても、米国や英国の水兵達が彼らに示している様な必ずしも良いとは言えない様な手本にも影響を受けずに、非の打ち所が無く振舞つた事と非常に誘惑の多い状況にもかかわらず脱走事件が1件も発生しなかつた事だ。

我々の海軍は、広大無辺な大洋を渡り遙か離れた国々で我々の旗を掲げた事で、過度の期待を正当化する様な流儀を再び維持したのだ。天意は、最初に試されねばならなかつた艦を、上方から一つの星を守護神として照らして見守つてくれたのだ。というのは、深刻な危険は》エリーザベト号《には迫らなかつたし、事故にも遭遇しなかつたからだ。この艦<sup>たね</sup>に乗合わせた大勢の人々の中に、死は犠牲者を求めなかつたし、重篤な病気が我々を襲う事も無かつた。

私は更に、礼服を着用して甲板に整列する下士官兵を閲兵し、士官諸君全員に心からの別れの言葉を述べ、艦長と共に礼式用の小艇に乗船した。そして士官達が艦橋に急行した時、下士官兵たちは登絃礼の定位置に付いた。そして国歌の響きとともに轟く様な万歳三唱が鳴響いた。すると私の両頬に涙が流れたが、私はその事実を認めるに恥じないのである。私が》エリーザベト号《で過ごした時間の思い出は、わが人生の最も重要な思い出に属するのであり、永遠に我が心に刻み込まれているのである。

》エンプレス・オブ・チャイナ号<sup>403</sup>《は、大洋に向かうべく、既に停泊していた。しかし舷門周辺には活発な動きが支配していた。公使館と領事館の諸士が夫人同伴で我々に伺候する為にまたもや乗船してきた。他の乗客たちの親戚や友人たちは暇乞い<sup>いとまごい</sup>を既に済ませていたのだ。我々はベッカーとイエーディナ<sup>404</sup>ともう一度最後の握手を交わした。

》エンプレス・オブ・チャイナ号《は機関の駆動を開始した。この巨大な船は港の出口に向きを変えた。何隻かの日本の軍艦や》エリーザベト号《から万歳<sup>おたけ</sup>の雄叫びが鳴り響いた。》エリーザベト号《の軍楽隊が我々の国民賛歌》嗚呼、汝、我らがオーストリア《を演奏した。出航後、》エリーザベト号《が今や小さな白い斑点でしかなくなるまで、そして横浜も我々の視界から徐々に消え失せてしまうまでの限り、我々はなお信号を通して挨拶を交換し、我らが旅の忠実な道連れたちに合図を送ったのだ。

》エンプレス号《の船上で私にとっては全く新しい生活が始まった。》エリーザベト号《艦上での様に全く自由に行動する事は出来なくて所謂遊歩甲板<sup>いっくろ</sup>に留まるように指示されたのだ。船橋は立入禁止の聖域を意味している。我々は、軍隊喇叭<sup>らっぱ</sup><sup>405</sup>や、号令や、叫び声や、耳を劈く様な上等兵曹の号笛<sup>406</sup>など、一言で言えば軍艦の兵隊達を寛いだ気持ちにさせる総てのものが無くなって、寂しく思うのだ。我が海軍の敏捷なる水兵達の代わりに我々が見るのは堅苦しい英国人達や、無愛想な米国人達や、細い目の支那人達である。ドイツ語、イタリア語、クロアチア語<sup>407</sup>の声音<sup>こゝろ</sup>の代わりに我々に聞こえて来るのは英語また英語の話し声である。起床の際にも就寝の際にも喇叭<sup>らっぱ</sup>の号音は響かない。愚鈍な銅鑼<sup>どらね</sup>の音だけが朝食、昼食、夕食を告げるのである。日に2度故国の旋律で我々を楽しませてくれた軍楽隊<sup>408</sup>は、午前早くから夜遅くまで酷使されて可哀想なピアノを演奏し続けて我々を閉口させる狂信的なワグナー<sup>409</sup>信奉者に代替されたので、誰もが逆上し、ピアノ保護協会に加入したくなる程であった。

》エンプレス・オブ・チャイナ号《は1891年にロンドンで建造された大きな美しい船でカナダ太平洋鉄道会社に所有されている。この鉄道会社はこのような3隻の蒸気船を香港とヴァンクーヴァーの間に就航させている。このようにして、カナダを横断する路線の旅客を獲得する為にである。この航路の運行費用を償う事が出来るのかどうか私は知らない。というのは、この運行経費は莫大であるのに、旅客数は大抵は小さなものだからである。

この船の主要緒元は以下のとおりである。船長：139メートル、船幅：15.5メートル、吃水：7メートル、排水トン<sup>410</sup>：5,904トン、載貨能力：3,008トン、3連式直結10,000馬力蒸気機関でこの汽船に時速18ノットの最高速度を与える：石炭消費量は最大運転すると24時間で200トンである：帆走設備は斜桁張り縦帆付4本マスト：内部照明は完全電化：旅客収容力、1等旅客170名、2等旅客26名、3等旅客406名：現在の乗船旅客は、1等72名、2等7名、3等160名である。》エンプレス・オブ・チャイナ《の船長はR.アーチバルドであり、英国海軍予備士官である。乗組員は71名の欧州人、142名の支那人から成っている。私の広々としてベッドが短いのが難点ではあるがそれ以外は快適な船室は

船橋の下にありの談話室の隣にある。

どの英国客船にも見られる様に、この船上でも直ちに特定の乗客番号が与えられ、特に喫煙が非常に制限された全般的乗船規則に順応しなければならない。

しばらくの間》八重山《に随伴され日本の海岸に沿って航行した。》八重山《艦上には公使、2人の公使館書記官、クライトナー総領事が乗っていた。最後に》八重山《から我々の方にまたもや万歳が鳴り響いた。そして徐々にこの軍艦と海岸が我々の視界から失われていった。我々は大洋に向かって舵をきったのだ！ (終)

.....

### 後書

私がフランツ・フェルディナントを知ったのは何時の事になるのだろうか。もちろん第1次世界大戦の契機になったサラエヴォでのオーストリア・ハンガリー「皇太子」夫妻暗殺事件の事は知ってはいたが、その犠牲者がどのような人であったのかは殆んど知らなかった。

1979年初頭にオーストリア政府が日本の資本市場で180億円の資金調達をしたが、その事務手続のためウィーンに何週間か滞在したのがオーストリアを好きになった<sup>きっかけ</sup>であった。その後何度もオーストリアを訪問するうちに軍事史博物館を訪問する事にもなり、そこでサラエヴォでの暗殺事件の際フランツ・フェルディナントが乗車していた弾痕も生々しい自動車と彼が着用していた血染めの軍服が展示されているのを見た。

その後勤務していた会社がウィーン駐在員事務所を開設する事になり社長に直接頼んで所長となった。1990年の事である。開設披露パーティはウィーンで最も格式が高いホテル・インペリアルで開催され、会長夫妻が東京から出席してくれた。その会長夫妻をフランツ・フェルディナント夫妻の墓地があり、フランツ・フェルディナント博物館もある、ウィーン西方100キロメートル程のアートシュテッテン城に案内したのを憶えている。

バブル経済の破裂の影響を受け3年後には駐在員事務所は閉鎖され私はワシントンに転勤となった。しかし、この3年間でフランツ・フェルディナント<sup>ゆかり</sup>所縁の地をオーストリア内外に訪ねることが出来たし、彼に関する書籍も買い集めることが出来た。その1冊が彼の世界旅行の日記であった。サラリーマン生活をしていたので上下巻800頁に達する浩瀚な日記の総てを読む事は出来なかったが日本訪問に関する部分を読み感激し何時の日か時間が出来たらぜひ和訳して紹介したいと思うようになった。2001年大学教授になったが最初は講義の準備等で忙しく翻訳の余裕は無かった。2003年になりやや余裕が出来、『日記』に時間を割けるようになり7月に早稲田大学で開催された日本国際文化学会の全国大会で「オーストリア『皇太子』の日本訪問」と言う表題の研究発表をした。その内容と和訳を勤務先の『紀要』で発表しようとしたが『紀要』年1回の刊行で、しかも原則10頁という紙幅制限があり、一気に発表しなかったが2004年3月に刊行できたのが14頁、2005年3月には10頁、2006年3月には36ページであった。完成していたゲラ刷りが紙幅制

限のため何時も没となっていくのは真に残念であった。

2005年は9月末まで滞欧して帰国早々に翻訳原稿を提出した。翌月の10月に元駐オーストリア大使の黒川剛氏と話をした際、9月に本邦初訳と銘打って『オーストリア皇太子の日本日記』が安藤勉氏の訳で講談社学術文庫から公刊された旨を聞いた。先を越されたかと胸の中が真っ暗となる気持ちであった。早速1冊を入手して拙訳と比較したところ、幸か不幸か、かなりの誤訳が見られた。困難な言葉を訳せず省略したり、とんでもない解釈をして誤訳したりしている。拙訳を完成する事の意味を見出したのである。

今回発表するのは安藤勉氏の訳に含まれていない8月25日の記事と前回紙幅制限のため割愛された本文と註を紙幅の許す限り掲載する。8月15日から24日までの記事は「オーストリア『皇太子』の日本訪問(4)」として『紀要』に発表する積りであったが、紙幅制限が続くと全巻の発表を終えるには合計10年を超えることになるので中止する。今回発表の部分を(5)とするのはその為であるが、(4)の部分は他の方法で発表し、その部分を含めて(1)から(5)までを出来れば単行本として刊行したいと思う。

この後書は安藤勉<sup>あとがき</sup>氏の邦訳が公刊されたにも拘らず、『日記』の和訳を『紀要』に発表する理由を記して刊行せよという本学紀要委員会からの要請に由るものである。

#### 註

- 33) 西郷隆盛(1827 - 1877)：明治維新の英雄で、日本で最初の陸軍大将、征韓論が通らず下野し、鹿児島に戻り不平士族の中心となり西南戦争の首魁となる。
- 34) 明治維新
- 35) 有栖川宮熾仁親王(1835 - 1895)、当時陸軍大将、参謀総長；戊辰戦争で東征大総督、西南戦争で征討大総督を務めた。
- 36) 別府伸介；西郷の副将桐野利秋(幕末の志士、中村半次郎)の従兄弟で城山の戦いの際は銃弾に倒れた西郷隆盛の介錯をしてその首を官軍に渡さぬ様に埋めてから切腹したと言う。
- 37) 8月10日大阪訪問時にフランツ・フェルディナントをアイスクリームでもてなしたとの日本側の記録があるが熊本に於いてもアイスクリームが存在した様だ。
- 38) 天守閣
- 39) フランツ・フェルディナント自身の事。彼は1890年に勳騎兵第9聯隊長も務めた。
- 40) フランツ・フェルディナントは皇族として1878年に歩兵少尉に任官するが、1882年に歩兵中尉に昇進、1883年に騎兵に転科し騎兵中尉となった。訪日時は陸軍少将であったが翌年の1894年には騎兵大将となる。(騎兵大将と言う階級は日本にはなかった。独・襖陸軍には元帥、上級大将、歩(騎、砲)兵大将、中將、少将の5階級があったが日本陸海軍では元帥は称号であり階級としては大将、中將、少将の3階級しかなかったからだ。)
- 41) 1888(明治21)年に日本陸軍は国内治安の維持が目的であった6鎮台を外征用の6個師団に改組し第1師団(東京)、第2師団(仙台)、第3師団(名古屋)、第4師団(大阪)、第5師団(広島)、第6師団(熊本)を編制した。更に1891(明治24)年に近衛兵が改組され近衛師団(東京)も編制され計7個師団がフランツ・フェルディナント訪日当時の日本陸軍であった。この兵力で翌年の1894(明治27)に始まる日清戦争を戦った。日清戦争後の1896(明治29)年北海道の屯田兵も改組され第7師団(旭川)が編制された。1898(明治31年)にはロシアに対抗するために5個師団が新設され第8～第12師団が編制されたので日露戦争は計13個師団で開始される事となった。日露戦争第2年目の1905(明治38)

- 年には第13～第16師団の4個師団が、日露戦後の1907(明治40)年には強引に第17、第18師団が、朝鮮併合後の1916(大正6)年には第19師団、1919(大正8)年には第20師団がそれぞれ朝鮮に編制され日本陸軍は21個師団体制となる。1925(大正14)年の宇垣軍縮で第13、第15、第17、第18の4個師団が廃止され17個師団体制が1937(昭和12)年の支那事変勃発まで続くが、その後大軍拡され1945(昭和20)年の敗戦に至るのである。
- 42) 轡<sup>ツツ</sup>で馬の口に銜えさせる部分。
- 43) 騎兵銃は乗馬した騎兵が革紐で背中に付けるので歩兵銃に比べる軽便である必要があり銃身が短く射程も短い。
- 44) 日本陸軍での呼称。1931(昭和6)年より呼称が変わり下士官兵と呼ぶようになった。
- 45) 当時のオーストリア・ハンガリーの貨幣単位：フランツ・フェルディナント訪日の前年1892年にオーストリア・ハンガリーは金本位制の通貨クローネを採用したが1900年までは過渡期とされ旧来の銀本位制貨幣のグルデンも1グルデン=2クローネの換算率で通用した。1890年時点での貨幣価値はパン1Kgが0.13グルデン、肉1Kgが0.65グルデン、電気1KWHが0.03グルデン、20gまでの郵便料金が0.12グルデン。
- 46) 欧州大陸の事。
- 47) 原文Obersten(対格)とあり陸軍大佐或は聯隊長という意味であるが当時の日本陸軍には騎兵聯隊はなくて騎兵大隊しかなかったので大隊長は中佐か少佐であって大佐ではなかったので大隊長と訳した。
- 48) 江戸時代の熊本藩主。フランツ・フェルディナントの熊本訪問に際しては旧藩士<sup>はんし</sup>に対し懇ろに対応する様にとの指示を発している。
- 49) Sauerampfer、緑色の植物、緑葉を料理に用いる。
- 50) 成趣園(水前寺公園)能舞台に物品が陳列されハンカチ、花瓶、香炉、茶碗、古物刀剣等合計1,000円程度を購入したとの記録が残っている。
- 51) 北白川宮能久親王の事：従兄という言葉が親戚と言う様な広い意味で使用されている。能久親王は明治天皇の祖父である仁孝天皇の猶子(養子)であったので明治天皇の父孝明天皇の義弟になり明治天皇にとっては義理の叔父となる。
- 52) 門司の瓜生商会所属の小蒸気船。
- 53) Van der Capellen-Straßeの訳：関門海峡の事、フランツ・フォン・シーボルトが江戸参府のため1826年2月22日に横断した際、シーボルトを日本に派遣してくれた蘭領東印度総督Van der Capellen(1778-1848)の名前を2月24日付で海峡の名前とした。
- 54) Provinz Tschöuschiuの訳：フランツ・フェルディナントはProvinzを国と言う意味で使用している。長州とは長門の国という意味であるからここではTschöuschiuではなくNagatoと書くべきであったのであろう。
- 55) 下ノ関要塞砲兵大隊、後に同要塞砲兵聯隊、下関重砲兵大隊、同重砲兵聯隊と改称。
- 56) 下関での宿泊先は旅館風月楼であった。
- 57) フランツ・フェルディナントが日本に向う途中の6月7日ソロモン諸島のオワラハで非常に魚突きを上手にやった乗艦“エリーザベト皇后”号乗組のオーストリア海軍上等兵曹。
- 58) 明治の元勳：初代内閣総理大臣、後に公爵。西郷従道海軍大臣と共に鎮守府視察旅行中。
- 59) 原文にはnachts(夜)に到着したとある。八重山乗艦は朝だから今夜(8月5日)ではなく昨夜(8月4日)になる。しかし伊藤博文は既に7月29日に下関に到着している。
- 60) 宮内省式部官伊藤勇吉、接伴員として長崎に向う途中下関で軍艦満珠に乗込む際に負傷。
- 61) Linschoten-Straßeの訳：紀伊水道の事、ポルトガル船に乗って初めて日本に来航したオランダ人だとシーボルトが信じたJan Huygen van Linschoten(1562/63-1611)に因む。しかし、彼は実際にはインドのゴアまでは来ているが日本には来訪していない。
- 62) 尋はヒロと読む。水深を測る単位で、1尋は約1.83メートル。
- 63) 周防灘





- 98) 御神籤
- 99) 中世ヨーロッパに広まった動物叙事詩の主人公である狐の名前。
- 100) 鐘楼
- 101) 八坂神社の旧称
- 102) 鳥居
- 103) 1591 (天正 19) 年に豊臣秀吉が寄進した現在地に建造された。
- 104) 左甚五郎：江戸初期の建築彫刻の名人、日光東照宮の眠り猫などで有名。
- 105) 教会堂の入口から祭壇にかけての中央部分。
- 106) 明治天皇
- 107) 天皇の勅筆
- 108) フランツ・フェルディナントは飛雲閣を訪れている。
- 109) 浄土真宗本願寺派門主大谷光尊
- 110) 生前の行いを尊び死後に贈られる称号。おくりな
- 111) シャーベットか？カキ氷か？
- 112) 祇園中村楼、一行 7 人が予約なしに接待員陸軍大臣副官村木少佐と共に突然訪問した。
- 113) 堀川武者小路上る川島甚兵衛氏の織物工場。
- 114) ラテン語の Antheraera Jama-mai の訳、天蚕<sup>テンサン</sup>、山繭<sup>ヤママユ</sup>とも言う。
- 115) 三井家当主不在の為に三井高朗氏が応対。
- 116) 蛤御門 (禁門) の変：長州藩が京都守護職松平容保の率いる諸藩の兵と戦い敗れた事件。
- 117) 蹴鞠の家元、公家の飛鳥井家
- 118) 第 4 師団長、陸軍中将黒川通軌：西南の役では征討第 4 旅団司令官代理、別働第 4 旅団司令官として力戦、戦後は広島鎮台司令官、名古屋鎮台司令官、第 3 師団長を歴任した、フランツ・フェルディナント訪日の 3 ヶ月後の 1893 (明治 26) 年 11 月に東宮武官長。
- 119) 大阪砲兵工廠
- 120) 第 4 師団司令部
- 121) 大阪城は熊本城より小さいとフランツ・フェルディナントが感じたのは、大阪城は大阪冬の陣 (1614 《慶弔 19》年) の結果外濠のみならず内濠まで埋められ夏の陣 (1615 《元和元》年) により落城したので、豊臣秀吉の時代よりも大幅に縮小されていたからであろう。
- 122) 大阪城本丸御殿
- 123) 大阪城の本丸内外は 1931 (昭和 6) 年に公園として整備され天守閣も再建されたがフランツ・フェルディナントが訪問した 1893 (明治 26) 年には廃墟のままであった。
- 124) 石山本願寺：1496 (明応 5) 年開創、1532 (天文元) 年要塞化、1570 (元亀元) 年信長との戦闘開始、1580 (天正 8) 年開城の際の火災で廃滅；従って 1571 年と言うのは誤りである。
- 125) 織田信長
- 126) 室町幕府第 15 代将軍足利義昭、1573 (天正元) 年に織田信長に追放され室町幕府は崩壊。
- 127) 信長は将軍を追放したが新しい将軍を任命した訳ではないので間違いである。
- 128) フランツ・フェルディナントは大阪夏の陣を徳川氏の豊臣氏に対する殲滅戦としてよりもキリスト教徒と浪人等不平分子の殲滅戦として把握している。
- 129) 徳川第 15 代将軍、徳川慶喜。
- 130) 鳥羽伏見の戦いに敗北した後に闇夜の大阪城を脱出し幕府艦隊の旗艦である軍艦開陽に乗艦しようとした徳川慶喜は暗くてたどり着けず偶然米艦 (副長が海軍戦略家として有名になる後のマハン提督であった。) に行着きその艦上で一夜を越し翌朝開陽に移乗し江戸に向った。米艦で江戸に逃げた訳ではない。
- 131) 大阪砲兵工廠で製作した火炮で最大のものは後の日露戦争の際に旅順要塞攻略に使用され有名となった 28 センチ鑄鉄榴弾砲で 40 センチ要塞砲と言うのは間違いである。

- 132) 1893 (明治 26) 年 7 月 17 日に大阪砲兵工廠は 1870 (明治 3) 年の設立以来初めての兵器輸出となる鋼 7 センチ山砲 6 門をポルトガル政府より 11,640.58 円で受注し 75 日以内に製造する契約を締結したばかりであった。製造済であった訳ではない。
- 133) 大阪借行社
- 134) これらの展示品は借行社固有の物ではなく地元の業者に命じて展示させたのである。
- 135) 大阪府知事山田信道
- 136) 湊町駅：当時の関西鉄道会社の大阪始発駅、後に国鉄関西線となり民営化後 JR 西日本により JR 難波駅と改称された。大阪では南と呼ばれる地域にある。
- 137) 原文では Udschi 駅と記載されているが場所的に言って明らかに王寺駅。
- 139) 止利仏師、鞍作止利あるいは鞍作鳥とも称し飛鳥時代の仏師、飛鳥寺の釈迦像、法隆寺の金堂の釈迦三尊像 (623 年) が現存。
- 140) 原文では Kami-no-do と記されているが、展示物からして現在の「<sup>カミノド</sup>上御堂」の事。
- 141) 四天王は持国天 (東方)、増長天 (南方)、広目天 (西方)、多門天 (北方) からなる。ここで四天王をその内の一人と言っているのは間違いか。
- 142) 釈迦牟尼はインド・ヒマラヤ南麓のカピラ城に生まれクシナガラで入滅したとされるので間違い。
- 143) 奈良での宿泊先は奈良倶楽部。
- 144) アジア南部産の鹿科アクシス属の鹿；赤褐色で白い斑点があり細い角を持つ。
- 145) ドイツで狩の対象になる動物で大型のもの：鹿、猪、熊、狼、鷲などの総称。
- 146) 舞楽の「還城楽」と「賀殿」
- 147) 仁明天皇 (810～850)、平安初期の天皇で嵯峨天皇の第 2 皇子 (在位は 833～850)。
- 148) 藤原貞敏 (807～867)、遣唐使を務め唐の音楽を日本に伝えた。
- 149) 音楽新能の「三輪」と「春栄」
- 150) 聖アントニウス (250 頃～356)、エジプトの隠修士、畜産の保護聖人とされる。砂漠での修徳生活は「アントニウスの誘惑」として絵画に描かれる。
- 151) Gwanpin と記されているが謡曲三輪の登場人物玄奘僧都の事。
- 152) 三輪明神：大神神社の俗称、祭神は大己貴神。能には三輪と言う演目があり、大和の国の女が毎夜通って来る男の正体が三輪明神だと確かめると言う物語になっている。
- 153) 狂言の「居杭」と「仏師」
- 154) オーストリア・南ドイツ・スイスに古くから伝わる楽器。映画『第三の男』で有名。
- 155) この夜フランツ・フェルディナントに催されたのは舞楽、音楽新能、狂言であった。胡琴と言うのは現在では胡弓の類を指すのであるが琵琶の古称でもある。また琴も出ている。琵琶や琴は能には用いないが音楽新能では用いた様だ。外国人向けにアレンジしたものか。
- 156) 正倉院の事
- 157) 校倉造の事
- 158) オーストリアのザルツブルク州に流れるザルツァハー川上流の地方。
- 159) これも同じくオーストリア・ザルツブルク州に流れるザルツァハー川上流の地方。
- 160) 奈良の大仏は盧舎那仏であって Amitabhas (阿弥陀仏?) ではない。間違いか。
- 161) 聖武天皇 (701～756)、奈良中期の天皇、文武天皇の第 1 皇子、光明皇后とともに仏教を信じ全国に国分寺・国分尼寺を、奈良に東大寺を建て大仏を安置した。(在位 724～749)
- 162) 東大寺が聖武天皇により創建されたのは 745 (天平 17) 年、大仏殿の完成は 751 (天平勝宝 3) 年、大仏開眼はその翌年とされているので 750 (天平勝宝 2) 年と言うのは間違い。
- 163) 源三位頼政 (1104～1180) が以仁王を奉じ平家追討を図り起こした 1180 (治承 4) の兵乱で平清盛の子の平重衡が 5 月に宇治で源頼政を破り 12 月には東大寺・興福寺を攻めて焼討。平重衡は 1184 (寿永 3) 年一の谷の戦に破れ鎌倉に送られたが奈良僧徒の要請で奈良に送られ翌年に斬られた。
- 164) 三好松永の乱で松永久秀が焼討。

- 165) 二月堂は東大寺境内にあり752(天平勝宝4)東大寺第2世実忠の創建でフランツ・フェルディナントの標示とは1年ずれている。現行の堂宇は1669(寛文9)年に徳川第4代將軍家綱(第3代家光の長子、1641~1680;在職1641~1680)が再建。
- 166) 東大寺法華堂の通称、仏教寺院ではあるが手向山八幡宮の直ぐ隣にあり現在でもそこから神官が来て儀式を行う場合があるという。
- 167) 石灯籠の燭台の部分をおーストリアで良く村外れ等で見られる石造りの小さな礼拝堂の部分に当て嵌めている。小さな石の礼拝堂は太い石の柱の上に置かれている事が多い。
- 168) 青銅製の灯籠
- 169) 現在のJR西日本東海道本線大阪駅の前身、大阪では北と呼ばれる地域にある。
- 170) 保津川下りの事;保津川は<sup>オネイガワ</sup>大堰川の一部で亀岡盆地と京都盆地の間を言う、嵐山付近からの下流を桂川と言う。保津川下りで有名。
- 171) 足利義政(1436~1473);室町幕府第8代將軍(在職1449~1473)が1482(文明14)山莊として造営し遺命により寺としたのが慈照寺(銀閣)であり銀閣は1489(長享3)年上棟。
- 172) 「洗月泉」の事。フランツ・フェルディナントは水車ではなく水車を回す水源が洗月泉だと言う事を理解できていない。
- 173) 原語ではStein der Betrachtung(考察の石)とあるが、「坐禅石」の事。
- 174) 記録には「丹波街道を西に向かわせられて篠村字王子より折れて山本浜に着せらる」とあるがヒロマジの現在の地名は残念ながら確認できない。
- 175) 当時の京都の人口は30万人に達しておらず嵐山周辺は市街地化されていなかったのでフランツ・フェルディナントは僻地と呼んだ。
- 176) ラテン語で「甘味を楽しめ!」という意味。
- 177) 割烹店<sup>サンジ</sup>三治
- 178) 六斎念仏踊、通常の踊の他に桂村の特技である獅子、虎の2曲。
- 179) 京都円山の旅館「也阿彌楼」、ここに在東京祿公使ビーグラーベン男爵や同年に青山光子との国際結婚した事で有名な代理公使のクーデンホフ・カレルギー伯爵が滞在していた。伯爵と光子の次男が汎ヨーロッパ運動の創始者でEUの先駆者と言われるリヒアルト・クーデンホーフ・カレルギー伯爵。
- 180) 寺院などの伝統的な建物。
- 181) 原語はReisplantagen、直訳すれば米作大農園であるが、実際は零細農民が耕作する稲田の集合であってPlantagen(大農園;大規模農業経営)ではなかったので間違いである。
- 182) 現在の膳所駅。馬場駅として1870(明治13)年7月15日営業開始。1913(大正2)年6月1日大津駅と改称、1921(大正10)年8月1日旧名の馬場駅に戻り、更に1934(昭和9)年9月15日膳所駅と改称され現在に至る。(ところで、現在の大津駅は1921(大正10)年8月1日営業開始)
- 183) フランツ・フェルディナントは8月4日の日記でその旨を述べている。
- 184) ドイツ、バイエルン州南部にある南部にある湖;作曲家リヒャルト・ヴァーグナーの後援者でノイシュヴァーンシュタイン城などの建設で有名なバイエルン王ルートヴィッヒ2世が1886年6月9日に精神病と診断され幽閉された直後の6月13日に侍医と共にこの湖で謎の溺死を遂げた。
- 185) 北方の間違い。
- 13b) 文頭の註13では明治天皇からフランツ・フェルディナントに差遣された緑色の制服を着用し佩剣した警護員を騎兵と訳したが、フランツ・フェルディナント訪日5年前の1881(明治21)年に創設されたばかりの宮内省主獵局の属官の可能性が高い事が判明した。
- 13a) 皇宮警部淵川親側
- 401) 当事の日本海軍での呼称を訳文に使用。陸軍では下士卒と訳した。(註44参照)
- 402) Gesamt-Detailofficierの訳。オーストリア・ハンガリー海軍特有の呼称。ドイツ海軍ではErster offizierと呼称。
- 403) フランツ・フェルディナントが横浜よりヴァンクーヴァーまで乗船したカナダ太平洋鉄道会社の蒸気

客船。

- 404) フランツ・フェルディナントがそれまで乗艦していたエリーザベト号の艦長と副長。  
 405) 日本の陸海軍でも兵営内や艦内での生活は総て喇叭の号音吹奏によって律せられた。  
 406) 万国の海軍に共通し下士官が号笛を吹いて水兵たちを指揮する。  
 407) 海の無い現在のオーストリアには当然の事ながら海軍は無い。陸軍の船舶工兵がドナウ川の警備艇を数隻有しているのみである。にもかかわらずオーストリア海軍連盟という組織があり全国に支部を有する。1904年にオーストリア艦隊協会と言う名称で設立され、その後に改名されたのだが2004年には設立100周年の行事が開催された。フランツ・フェルディナントは1908年より暗殺される年の1914年まで名誉総裁を務めた。オーストリア・ハンガリー海軍の根拠地はトリエステやポーラであって現在はそれぞれイタリアとクロアチアに属する。オーストリア・ハンガリー国軍の指揮用語はドイツ語であったが、それ以外の日常に用いられた言葉は多民族国家だけに12ヶ国語にのぼる。エリーザベト艦上でドイツ語、イタリア語、クロアチア語が入混じっていたのは当然である。オーストリア海軍連盟は現在もイタリア海軍協会、クロアチア海軍協会との友好関係を保っている。  
 408) 日本海軍でも艦隊の旗艦には軍楽隊が乗組み司令長官の食事の際には音楽を演奏した。  
 409) Richard Wagner (1818～1883)、ドイツの作曲家、圧倒的な音色のオペラで有名。  
 410) 排水トンとは普通は軍艦に用いられ、客船の場合は総トンを用いるのが普通である。フランツ・フェルディナントはそれまで軍艦に乗艦していたので間違えたのであろう。

#### 参考文献一覧 (続)

- 43) 日本近代資料研究会 伊藤隆編、『日本陸海軍の制度・組織・人事』、東京大学出版会、1971年  
 44) 秦郁彦編、『日本陸海軍総合事典』、東京大学出版会、1991年  
 45) 大濱哲也・小沢郁郎編、『改訂版日本陸海軍事典』、同成社、1995年  
 46) 大阪砲兵工廠、『大阪砲兵工廠沿革史』大阪砲兵工廠、1902年(久保在久編・解題、三宅宏司・大前眞・小野芳朗資料解説、『大阪砲兵工廠資料集、上巻』、日本経済評論社、1987年、に復刻所収)  
 47) 野村實著、『日本海軍の歴史』、吉川弘文館、2002年  
 48) 『日本軍艦史(『世界の艦船、第500号』)、海人社、1995年  
 49) フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト著、中井晃夫訳、『日本 第1巻』、雄松堂出版、1977年  
 50) フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト著、中井晃夫・斎藤信訳、『日本 第2巻』、雄松堂出版、1978年  
 51) フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト著、中井晃夫・八城衛衛訳、『日本 図録第1巻・付図』、雄松堂出版、1978年  
 52) 日本国有鉄道、『日本国有鉄道百年史別巻、国鉄歴史事典』、翻刻発売所財団法人交通協力会、1973年  
 53) 吉村昭著、『彰義隊』、朝日新聞社、2005年  
 54) 東京偕行社内堂陰會編纂、編輯兼発行人代表者森林太郎、『能久親王事跡』、発売元春陽堂、1908年  
 55) 宮内庁、『明治天皇紀 第八』、吉川弘文館、1973年  
 56) 『官報』、自1888(明治21)年4月20日至1893(明治26)年8月30日  
 57) 『鎮西日報』、長崎、自1893(明治26)年7月1日至8月30日  
 58) 『熊本新聞』、熊本、自1893(明治26)年7月1日至8月30日  
 59) 『大阪朝日新聞』、大阪、自1893(明治26)年7月1日至8月30日  
 60) 『日出新聞』、京都、自1893(明治26)年7月1日至8月30日  
 61) 『東京朝日新聞』、東京、自1893年(明治26)年7月1日至8月30日  
 62) 『東京日日新聞』、東京、自1893年(明治26)年7月1日至8月30日  
 63) 『都新聞』、東京、自1893(明治26)年7月1日至8月30日  
 64) 『歴史読本(特集 天皇と皇族)』2006年11月号、新人物往来社  
 65) 佐山二郎著、『日露戦争の兵器』、光人社、2005年

## ARCHDUKE FRANCIS FERDINAND'S VISIT TO APAN (PART 5)

Hajimu WATANABE

*Graduate school of Science and Humanities,  
Kurashiki University of Science and the Arts,  
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*  
(Received October 5, 2006)

The archduke Francis Ferdinand, heir to the throne of Austro-Hungary, is well known as the victim of an assassination which took place on the 28<sup>th</sup> of June 1914 in Sarajevo. He was murdered together with his wife by a group of Servian students in Bosnia-Herzegovina. This incident caused the First World War and changed the good old days of Europe.

The archduke visited Japan for twenty-four days during an around-world-trip in 1892–1893. During this time, he kept a diary recording his experiences and impressions of his travels. The entries on Japan consist of 140 pages. These observations vividly describe the circumstances at that time and draw insightful contrasts and comparisons with Europe.

Therefore, I believe it is very useful to provide the Archduke' diary entries on Japan in Japanese. Publication of my translation from German began three years ago in this bulletin. Due to the page limitations each year, I have divided my work into sections. Part (1) appeared in 2004, part (2) in 2005 and part (3) in 2006. This process has taken extra time. For this reason, in the current bulletin I must skip part (4), which will appear another media, and proceed to part (5). In the near future I hope to publish the entire contents of my translation, parts (1), (2), (3), (4) and (5) together in one book.

---

### Bibliography

42) Wladimir Aichelberg und Karl Skrivanek, *100 Jahre vom Österreichischen Flottenverein zum Österreichischen Marinenverband*, Wien, 2004